

インドシナ旅日記

敬虔な仏教徒であったはずの武士森本右京太夫でさえ祇園精舎と錯覚してしまうほどの大伽藍を持つアンコール・ワットです。本来な駆け足に近い時間では十分に時を遡ることはできませんが、それでもトム君という素晴らしいガイドのおかげで楽しむことはできました。二度目のアンコール・ワットというチャンスが到来するならば、ここだけで最低朝夕2回ずつ3日間で6回くらいは訪れてただじっと時間の流れを味わってみたいとは思いますが。

今回の訪問を一ノ瀬泰三氏に捧げるとともに、森本右京太夫と彼の感動と興奮を共有したいと思っています。



6. 「アンコール・ワットの回廊's-1」

アンコール・ワットは外側を幅約200メートルの環濠で囲まれています。濠（堀）と言ってもここが建てられた時にはヒンドゥー教の寺院でしたから、防御の意味はそれほど強くなく、むしろ日本の仁徳陵と同じような目的だったようです。それは周囲を掘った分の土を中心部に積み上げることで、平らで雨の多い地方で、乾燥したしっかりした地面を確保することです。濠には西側の正面から石の橋が架かっているのですが、現在そこは日本の資金と技術の協力によって改修中で、すぐ横に浮き桟橋のような仮橋がかけられています。橋を渡って大伽藍までまだ約500メートルあります。橋を渡ったところから200メートルほど進むと、左右に経蔵があります。北側の経蔵は日本政府



の支援で修復されたと書いた看板が出ていました。さらに100メートルほど進むと、やはり左右に蓮池があり、その水鏡に映しこまれる大伽藍のシルエットと朝日の美しさは有名で、わたし達も池のほとりで朝日の上がるのを大勢の観光客と待っていました。可愛い少女の土産物売りが、カモ爺さんを見つけて寄ってきましたが、鬼のような連れ合いが「一人から買ったらみんなにたかられる」というので、わたしも心を鬼にして何も買いませんでした。

残念ながら朝日の昇る瞬間は雲に覆われて訪れられませんが、気を取り直していよいよ大伽藍の中です。大伽藍はまず外側を取り囲む約180メートル四方の第1回廊があり、その西側の正面（西側）門から入るとそこが50



十字回廊内部の沐浴用プール。全く同じつくりのものが4つ十字形に配置されています。

0メートル四方の十字回廊です。十字回廊を過ぎると約110メートル四方の第2回廊、そして中央に聳える主塔とそれを取り囲む4つの副塔からなる約50メートル四方の第3回廊から構成されています。それらが全てレリーフも石造も含めて砂岩で作られています。



プールを見下ろす回廊の壁には半裸のアプサラ女神たちのレリーフがたくさん彫られています。往時は石に掘られたレリーフではなく、生身の女神達が柔肌をさらして、禊をする王の世話をしていたのでしょうか。

まずは正面入り口から十字回廊に入ります。上の写真の右側（西側）に見える十字形にしきられた場所が十字回廊です。ここは回廊というより4つの沐浴場（プール）とそのための通路です。沐浴はどれも王が参詣する際に沐浴するためのものだそうですが、何故4つも必要だったのかは不明のようです。今は水は張られていませんが、給排水や雨水の受け込みなどのための施設や樋などもあり、もちろん換水のための排水設備も完備してい



十字回廊の中心部を見上げて記念写真を撮りました。まだ早朝のため薄暗くフラッシュも天井までは届いていません。

ます。鎌倉幕府成立の頃にこれだけ完成度の高い大建造物を作ることの出来る建築技術には、まだまだ入口にしか過ぎない十字回廊だけでも、完全に圧倒されました。